

# 住谷天来と堀口家

—堀口家寄贈住谷天来資料について—

山下智子

## 一、はじめに

二〇一七年九月二七日、群馬県高崎市の堀口家より、扁額二面、屏風一隻、が同志社社史資料センターに向け搬出された<sup>1)</sup>。いずれも群馬県の日本組合基督教會甘楽教會（現日本基督教團甘楽教會）で一六年八か月にわたり牧師を務めた住谷天来（一八六九年二月一六日～一九四四年一月二七日）が揮毫した堂々たるものである。

天来（弥朔）は群馬郡国府村東国分（現高崎市）に生まれ、一八八八年に日本組合基督教會前橋教會で熊本バノドの不破唯次郎より洗礼をうけ、廢娼運動に取り組み、その後一八九〇年に上京して早稲田及び慶応義塾で学び、一八九二年より共愛女学校で教師をしていたが、一八九六年に女学校拡張計画をめくり辞任、再び東京にて教師や執筆をなしカーライルの『英雄崇拜論』などを翻訳し評価されたが、大逆事件の際に社会主義者の嫌疑を受け一九一一年に群馬に戻った。日本基督教會の教師試験を受験、一九一二年に按手を受け日本基督教會伊勢崎教會（現日本基督教團伊勢崎教會）、一九一八年甘楽教會の牧師となった。内村鑑三や柏木義円とも親交があり

日露戦争時から非戦を唱えた平和主義者としても知られるが、墨子に影響を受けた非戦論など天来の思想は、彼が甘楽教会時代の一九二七年一月に創刊し、一九三九年六月まで一四九号にわたり発行した雑誌『聖化』などに明らかである。<sup>(2)</sup>

天来は同志社第一四代総長の住谷悦治（一八九五年二月一日〜一九八七年一〇月四日）の叔父にあたる。悦治は天来を尊敬しその詳細な伝記を書くことを願いながらもかなわないまま召天した。今回は上記の屏風と額に加え、晩年の悦治が伝記執筆のために堀口家に天来のことを問い合わせた心情あふれる書簡や、住谷天来建碑関係資料、写真なども併せて寄贈された。<sup>(3)</sup>

堀口家は、初代堀口栄蔵のご一族で、甘楽教会を隠退した後の天来夫妻を高崎市の自宅に迎え、夫婦がなくなるまで支え続けた一家である。寄贈は、初代栄蔵の五男であり現在では唯一生前の天来を記憶している堀口基榮さん（日本基督教団原宿教会員）、初代栄蔵のひ孫にあたり現在の堀口家当主である堀口航平さん（日本基督教団高崎教会員）の名前でなされたが、寄贈資料の搬出の際には、京都より来られた同志社社史資料センター上田裕保事務長を、堀口家の皆さん（堀口基榮さん、堀口航平さん、堀口時子さん、堀口真起子さん、堀口紗代さん、渡辺和子さん）が出迎え、高崎教会生地善人牧師及び著者も同席した。

基榮さんは一九四〇年クリスマスのお生まれで、「基督が栄える」とのお名前は天来によるものという。天来と共に暮らした幼き日の思い出は、盛大なクリスマスの様子である。堀口家は、詳しく後述するが、かつて「堀田屋」という屋号で商売をしていた。クリスマスには年末の多忙な時期にも関わらず商店が休みとなり、家族従業員



甘楽教会クリスマス（天来在任時）

一同集い、近隣の方も招いてクリスマス会を行った。天来の指導により飾り付けがなされ、サンタクロースが登場するなどそれは盛大なもので、天来の死後もこの習慣は続いたという。なるほど『甘楽教会百年史』によると、天来が牧師を務めていた頃の甘楽教会のクリスマスには最大で約六〇〇名の人々が集っており、東方の三博士の壁画が飾り付けられ、サンタクロースも登場する力の入ったものであった。<sup>①</sup>

一族の皆さんによると、初代栄蔵の跡を継いだ長男の喜八郎改め二代目栄蔵らは天来より自宅で洗礼を受けたそうだが、天来が共に暮らした時代の堀口家はいずれの教派にも属さない教会のようでもあったのだろう。この時代、堀口家では日曜学校を行っていたとの証言もある。<sup>②</sup>

本論では以上を踏まえ天来と堀口家の関係及び、今回寄贈された資料の中核をなす扁額と屏風を紹介する。

## 二、住谷天来と堀口家

『甘楽教会百年史』によると、住谷天来は一九一八年四月より一九三四年一月まで群馬県富岡市にある甘楽教会の牧師を務めたが、初代堀口栄蔵（一八九四年四月一日～一九五八年三月一九日）は一九二四年二月一日に天来より洗礼を受けている。満二九歳の時である。この時初代栄蔵以外に堀口美恵子ら五名が共に洗礼を受けている。美恵子は栄蔵に続き「同美恵子」と記されているので、栄蔵の長女である恵美子の誤記かもしれない。この時恵美子は生まれて数か月の乳児であるので、だとすれば幼児洗



初代堀口栄蔵

礼だったことになるだろう。また一九三三年二月二五日のクリスマスの際には初代栄蔵の従弟に当たる堀口万亀蔵が生徒総代として祝辞を述べている。<sup>(6)</sup>

堀口家はもともと富岡で「堀田屋」という屋号の商店を経営していた。「堀田屋」は初代栄蔵の曾祖父に当たる堀口松五郎が創立したものである。<sup>(7)</sup>「堀田屋」は富岡製糸場などに野菜を納めていたという。<sup>(8)</sup>仕事から初代栄蔵も経済に明るかったのだろう、一九二五年五月一〇日の教会総会では教会会計の赤字を補填すべく初代栄蔵は募金の任に当たり、会計補佐を務めることとなっている。

しかし、初代栄蔵について、残念ながら『甘楽教会百年史』には前述以上のことは記されていない。とはいえ、天来は月刊誌『聖化』を一九二七年一月から一九三九年六月まで一四九号にわたり発行したが、『聖化』のすべての号に「堀田屋」の広告が掲載されている。そうしたことから、「堀田屋」が天来と天来の『聖化』を通しての伝道活動をよく理解し、変わることなく支え続けたことがわかる。<sup>(9)</sup>

「堀田屋」は富岡より高崎に出店し、一九二七年に合名会社「堀田屋」を設立した。<sup>(10)</sup>一九二七年一月の『聖化』創刊号の広告によると、「堀田屋」は富岡宮本町にある「乾物並果物商」であり、「高崎市本町一丁目」に「堀田屋出張店」があった。ここでは富岡の「堀田屋」が広告の中心で高崎の「出張店」は小さな扱いになっている。しかしながら翌一九二八年一月の第一三号の広告から、両店の扱いは逆転し「乾物並果物問屋」「堀田屋支店」である高崎店が広告の中心であり、

富岡宮本町 乾物並果物商 <b>堀田屋</b> 電話百十七番	乾物並果物問屋 高崎市本町一丁目 <b>堀田屋</b> 支店 電話七十番
---	--

堀田屋広告 (1928.1~1935.6)

高崎市本町一丁目 乾物並果物商 <b>堀田屋出張店</b> 電話十七番	乾物並果物商 富岡宮本町 <b>堀田屋</b> 電話百十七番
--	---

堀田屋広告 (1927.1~1927.12)

その脇に小さく富岡店が記されており、高崎の店が次第に大きくなっていく様子がわかる。

一九三四年夏、天来夫妻とともに病に倒れ、天来は思うように牧師としての職務が担えなくなり、夕拝も中止せざる得ない状態だった。そのため天来は「到底御教会の牧師としての責任を全ふし、其職能を尽し得ざることを痛感」したとして一月末をもって辞任し「高崎市赤坂村三六九」に隠居した<sup>(1)</sup>。天来の引退を安中教会牧師の柏木義円は一九三五年一月発行の『上毛教界月報』第四三五号で「教界人乏しきの際、学、徳、信深き先生のご退隠を深く惜しむ」と報じた<sup>(2)</sup>。

天来は隠退に伴い『聖化』を一九三四年一二月発行の第九六号をもって廃刊することを決意し、この号に「終刊の辞」を掲載した。しかし実際には廃刊とはならず一九三五年一月に第九七号が発行された。そこには「熱心なる誌友の待望と同情ある友人の推賞に感激して、亦々細い乍らも続刊することになった」とある。

同年七月発行の『聖化』第一〇三号では、第一三号以来使用されてきた「堀田屋」の広告が新しくされたが、その広告には「高崎市本町三丁目」の店に加え、「向請地町三六九」の「工場」もするされ、その一方で「支店」の文字が消えている。富岡店の「出張店」として始まった高崎店が、やがて「支店」「問屋」となり、この頃には「工場」まで構えて大々的に商売を行い、富岡の店とは別に独自の歩みをしていったことがわかる。

工場があった「向請地町三六九」とはすなわち天来が隠居し移り住んだ「高崎市赤坂村三六九」である。つまり高崎の「堀田屋」で成功した初代栄蔵が、「老いて勢力と財力と乏しき身」の天来を丁重に自宅に迎えたのだ。自由な言論をすることがますます難しくなっていた時代だが、初代栄蔵は食料統制組合の理事長をつとめたほ

果乾物並 堀田屋	富岡宮本町	乾物並 堀田屋
高崎市本町三丁目		
堀田屋		
電話(川店) 七十七番		
工場		
電話(工場) 七十八番		

堀田屋広告 (1935.7~1939.6)

どの地元の実力者であり、「堀田屋」の工場でつくられた漬物などは高崎の陸軍歩兵十五連隊に納品されていた。そうしたことから、天来の活動も地元警察に多少大目に見られていたともいう<sup>(13)</sup>。天来は発行禁止が命じられたことを機に一九三九年六月発行の第一四九号をもって『聖化』を廃刊せざる得なくなるまで、堀口家の一室で『聖化』を発行し続けた。

天来は一九四四年一月二七日に死去したが、その遺骨は遺言に従って甥の住谷悦治の手で利根川に散骨された。しばらくたつて墓は住谷家の墓地に堀口家により建てられたが、それは天来が生前に自らの手で建てた最初の妻・美津子、息子・穆の二基の墓に並び似せて作られている。正面に「住谷天来之碑」、裏面に天来の生没年、後妻・朝江の名と没年が刻まれ、さらに「天来先生の没後そのまゝ、になつてゐるので先生の徳を偲び先代栄蔵の遺志を次いで篤志の方々による再建の日まで一時この碑を立てさせていたゞきました 高崎市 堀口家」とある。「一時」とは刻んであるが、何世代にもわたり受け継げるような立派なものであり、形状や文言などにも配慮が感じられる。この碑の建立の中心にいたのは初代栄蔵の妻・キミであるが、ここからも天来と堀口家の特別な関係性が伺われる<sup>(14)</sup>。



堀口キミ



右より住谷天来、美津子、穆の碑

### 三、寄贈資料の紹介

ここでは堀口家から寄贈された、扁額と屏風と紹介をする。なお翻刻は同志社社史資料センターの小林文広所長にご協力いただいた。

#### (ア) 扁額「治己心者優攻取城者」

治己心者優攻取城者 ソロモン語 天来

典拠は旧約聖書の箴言一六章三二節後半である。新共同訳聖書では三二節は「忍耐は力の強さにまさる。自制の力は町を占領するにまさる」となっている。天来がいつどうした経緯で記したものであるのかは不明であるが、天来が堀口家に住んでいたのは、前述の通り一九三四年末から一九四四年初めの約九年間であり、一九三九年には宗教団体法が出され一九四一年には政府の主導により日本基督教団が発足し、太平洋戦争が勃発するなど非戦平和を唱える天来にとって大変困難な、忍耐を要する時代であったことと無関係ではないだろう。

#### (イ) 扁額「先求神之國与其義」

先求神之國与其義 堀口君 □□ 天来

典拠は新約聖書マタイによる福音書六章三三節前半である。新共同訳聖書によると三三節前半は「何よりも

まず、神の国と神の義を求めなさい」となっている。この箇所はキリストが空の鳥、野の花を指し示し神の被造物に対する大きな愛と配慮について語り「思い悩むな」と教えた箇所である。

(ウ) 六曲屏風

① 第一扇

花無心開花蝶無心来花蝶来

花自落花落蝶不知蝶去花不識

不知兮不識従帝則而已

天来道人 「朱印」 「朱印」

良寛の詩に以下のようなものがある。

花無心招蝶 蝶無心尋花 花開時蝶来 蝶来時花開

吾亦不知人 人亦不知吾 不知従帝則<sup>⑤</sup>

天来はこの良寛の詩に影響を受け、第一扇の漢詩を創作したと考えられる。一九三三年九月発行の『聖化』第六九号の「詩歌之國」欄に「従帝則耳」と題した黙庵の次のような詩が掲載されている。「黙庵」とは天来

が漢詩を作る際によく用いた号である。

花無心招蝶 蝶無心尋花。花開時蝶来

蝶来亦花開 風月互相和。花蝶互作媒。

生殖興繁殖 奇々怪々。』問天天不答

問我我不知。不知兮不識 只從帝則耳。

『聖化』第六九号に掲載された詩の前半は良寛の詩と完全に一致しているが、堀口家の屏風では「花無心開花」と始まっており、より独自性がみられる。天来が堀口家に住んだのは一九三四年からであるので、『聖化』の詩をさらに推敲したものが第一扇の詩であるかもしれない。いずれも自然の摂理を歌っているが、天来の詩はキリスト者として花や蝶のように天地を創造された神の御心にただ無心に従うことの大切さを歌っていると考えられるだろう。

② 第二扇

夢乘大鳳行蒼穹忽渡銀

河入帝宮身在聖也純光

天醒来簾外梅花風 「朱印」 「朱印」

天来の詩集である『黙庵詩鈔』（平和舎、一九四一年）に多少の文字異同があるが同様の詩が掲載されている。<sup>16</sup>

夢乗大鳳夜行空 忽渡銀河入帝郷

身正在純光之天 醒來簾外梅花風

『黙庵詩鈔』には天来自身により次のように読み方も記されている。

夢に大鳳に乗って夜空を行く、忽ち銀河を渡りて帝郷に入る。身は正に純光之天に在り、醒め来れば簾外梅花の風

字義の解説もあり、それによると次のとおりである。

帝郷は天帝の都を指す。莊子に『乘彼白雲至於帝郷』とあり。純光之天とはダシテの描いた十天の中の最高高の天即ち純乎たる光の満てる處を曰ふ。

顧みて堀口家の屏風では「夜行空」が「行蒼穹」に、「帝郷」が「帝宮」に、「身正在純光之天」が「帝宮身在聖也純光」になっている。いずれにしても夢で光に満ちた聖なる天の都に飛び、醒めて梅の香りに包まれる

美しい詩となっており、天上にあっても地上にあっても神の恵みの中にある幸いを思わされる。

この詩に関しても一九三六年九月発行の『聖化』第一一七号の「詩歌之國」欄に原形と思われる以下の詩が掲載されている。

夢誇大鳳上蒼穹 直超十天入淨宮。

身在聖衆常樂界 覺來樓翠巒風。

③ 第三扇、第四扇

心月孤圓

光吞萬象

為堀口家 住天來 「朱印」 「朱印」

禪の公案である『碧巖錄』の九十則にある言葉である。<sup>(註)</sup>『碧巖錄』は特に臨濟宗で重要な書とされる。悟りを開いた心を円で表しているという。天來がどのような意図でこの言葉を堀口家に送ったかは不明であるが、キリスト者としては「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネによる福音書八章一二節)、「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」(エフェソの信徒への手紙五章八節)などの聖書の言葉を踏まえて理解するのがふさわしいだろう。

④ 第五扇

昨夜滿庭落葉声孤吟

歌枕無限情嗚呼七十餘年

夢忽然醒来宇宙明 住谷山人

〔朱印〕〔朱印〕

天来は漢詩の中で自身の年齢を数えて「何歳」と現す場合が多い。例えば、一九三四年二月発行の『聖化』第九六号にある天来満六五歳時の詩の冒頭は「古稀七十欠四歳」である。また一九三八年四月発行一三六号にある満六九歳時の詩は「二月十六日、我誕生日之日也。因賦長詩而書懷」として詩の冒頭は「天特寵我與七十齡」となっている。後者の詩は「天は特にわたしのやうな者まで愛して七十の齡を與えてくれた」との意味も併せて記されている。

一方、天来は人生の歩みが丸何年間であるのかを表す場合は「何年」と現す場合が多い。例えば一九三九年五月発行『聖化』一四八号掲載、天来満七〇歳の時の詩の冒頭は「七十年来食天倉」である。併せて「七十年の間忝け無くも天ツ御藏のカテを頂戴した」と説明されている。『聖化』は第一四九号で廃刊となるが、第一四八号、第一四九号には、自身の人生を感慨とともに顧みて「七十年」との文言が入る詩が複数掲載されている。

顧みて第五扇の詩には「七十餘年」とある。この漢詩は天来が『聖化』を廃刊した後の作品である可能性がある。『聖化』には「詩歌之國」という詩の投稿欄があり、そこに毎号天来はたくさん漢詩はもちろん、短歌、

文語詩を発表した。しかし、『聖化』を廃刊した一九三九年から亡くなる一九四四年までの間、おそらく詩歌を作る習慣は続いていただろうが、その作品が人目に触れる機会は少なくなった。そうした意味でも天来最晩年の姿を知りうるこの作品は貴重であり、天来が最後を過ごした堀口家にふさわしいものである。

この漢詩で天来は庭の落葉から宇宙へと心を広げる。天来にとつての宇宙とは、神が創造された天地万物に他ならず、その中心には万人の救いの為に御子イエス・キリストを与えてくださった神がおられる。天地創造の初めに混沌とした闇があり、そこに神が光と秩序もたらして下さったことなども思い起こされる。

⑤ 第六扇

孔子一貫忠恕弘則氏盛徳

偕衆行釋迦慈眼歩中道

醫蘇來能之大成 天来

〔朱印〕〔朱印〕

この詩に関しては『黙庵詩鈔』に「清興」と題し同じ詩が掲載されており、天来自身により次のように読み方も記されている。<sup>(18)</sup>

孔子一貫忠恕を弘め、則氏盛徳衆と共に行く、釈迦は慈眼にして中道を歩み、醫蘇は來つて能く之を大成し給ふ

字義の解説もありそれによると、「即氏」はソクラテスの略字で、「醫蘇」はイエス・キリストの略字である。この詩に関しては天来自身による詩の大意も記されており、以下のとおりである。

孔子は曾て我道は一以て之を貫く、敢て問ふ、一貫とは何ぞ、曰く恕のみと答へられた、則氏は露頭跣足  
亞典の市に出でて多くの人々に接し、其處で問題を設けては懇切に人間の歸適を教えた。釈迦には八萬四  
千の法門があり、その經典は五千餘卷に達するといふが、要するに迷へる衆生を濟ふには有に偏せず無に  
著かず、中正の道にありと教えた。處が醫蘇になると前三者の教えとし道としたものに加へて、死に打克  
つこの道、神の子となるの道、永遠の命を把握する道を立證して、之を大成し完成し給うた、是我々の導師  
とし大先達として従はねばならぬ所以である。

天来の著書に孔子について論じた『孔子及び孔子教』（警醒社、一九一一年）がある。この本で天来は孔子  
とその教えを批判している。序言において内村鑑三は「余の友人住谷天来君は其性来の質より謂ふも、亦其学  
問の性質より考ふるも純粹の漢学者である。然るに此人が孔子を仰がずにナザレ人のイエスの弟子として事ふ  
るのである。余が特に君を刑する所以は茲にある」とし、天来の主張を踏まえ「而して彼（筆者注 キリスト）  
の十字架の下に立つてのみ、孔子も釈迦もソクラテスも正常に解することができるのである。住谷君の孔子論  
はこの立場より觀たる評伝である、その我邦に於て異例なるは茲に在る」としている。

#### 四、おわりに

堀口家から寄贈された住谷天来資料に関して、天来と堀口家の関係を述べ、扁額二面と屏風に揮毫された内容について述べてきた。

住谷天来という内村鑑三や柏木義円と共に、日露戦争の時より一貫して非戦を唱えてきた平和主義者として知られている。天来が発行した月刊誌『聖化』に目を通してみると、社会と人々の「聖化」を願ひ作られた雑誌にふさわしく、社会に対する鋭い視点が多々見受けられ、聖書を引用しキリストの教えをわかりやすくかつ興味深く記している。しかし『聖化』を見た時に、なんといつても目に付くのが、詩や文学に関する話題であり、頁によっては文芸雑誌のようでもある。驚かされるのは天来の幅広い知識と教養である。誌面には古今東西の哲学者や偉人、著名な作家や詩人などの名前や名言、作品などが巧みに織り込まれている。今回紹介した資料だけでも、イエス・キリストについてや聖書の言葉はもちろん、良寛の詩、ダンテの『神曲』、『碧巖集』、孔子、荘子、ソクラテス、釈迦など自在に踏まえており、博識な天来の姿がよく表れている。

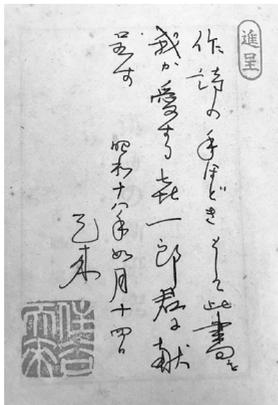
天来は特に詩歌を愛しており、『聖化』の巻頭は多くの号で、彼自らが確かな語学力をもって翻訳した著名な詩人の詩が紹介されている。この『聖化』誌上での取り組みはやがて『聖哲遺詠 人生之歌』（一粒社、一九三五年）として実を結ぶ。この本はミルトン、ダンテ、テニスン、ゲーテ、ワーズワース、ブレイクなど欧米の著名な詩人作品を天来が訳し、評と注を施したものである。一九三五年六月発行『聖化』第一〇二号には天来による出版広告があるが、そこに「詩歌の無い人生は砂漠であります、そして詩歌を知らない世は全くの墓場であります」とあり、詩歌に対する天来の強い思いがよく表れている。

天来の詩歌への思いは『聖化』誌上の「詩歌之國」欄にも表れている。これは様々な人々による詩歌の投稿欄だが、毎号天来の漢詩、和歌、文語詩などが多く掲載され、号によっては天来の詩歌のみということもある。この欄の作品からすでに紹介した天来の詩集『默庵詩鈔』が生まれた。

天来は一九三七年十一月発行一三二号の「編輯餘録」に「尤も楽しとする詩歌之國を休みました。その代り次號うんと載せませす」と記しており、ここからも天来の詩歌を愛する気持ちや創作意欲がうかがえる。なお天来が漢詩を創作する際に多く用いる「默庵」の号について、同じ一三二号の「編輯餘録」に「◎今は戦争の眞最中、軍國の世界、軍人の天下事苟くも之に對する嚴正の批判とあれば忽ちに發禁と没収でおまけに罰金を科せられます。◎三大自由は許されてあるもの、筆と舌とは中々自由に参りません、私の默庵の號は之に因たものです」としている。

筆と舌の自由を奪われた天来がしばしそうした辛い状況を逃れて遊び、自己を表現し、信仰者として力を得たのが「詩歌之國」、つまり詩の創作であったのだろう。默庵自身を詠った漢詩も複数残している。

今回寄贈された資料には含まれないが、堀口家には『聖化』廃刊後に、堀口家の人々と詩歌の喜びを分かち合おうとする天来の姿を示す他の資料も残されている。佐々木久『作詩と鑑賞 漢詩の新研究』（古明地書店、一九四二年）である。見開きに「作詩の手ほどきとして此書を我が愛する崑一郎君に献呈す 昭和十八年如月十四日 天来」と記されている。天来が亡くなる一年前のことである。名前に誤りがあるがこれは間違いなく天来が二代目栄蔵（喜八郎）に送ったものであ



『漢詩の新研究』天来署名

るとのことである。天来は二代目栄蔵が長男であるので「喜八郎」ではなく「喜一郎」と勘違いしていたと思われる。あるいは耳が不自由であったことも関係があるかもしれない。

以上の事より、今回堀口家から寄贈された扁額や屏風は、天来が舌と筆の自由を奪われ黙せざる得なかった時代、つまり一九三四年一月末の甘楽教会隠退時から一九三九年六月の『聖化』廃刊を経て、一九四四年一月に世を去るときまで、天来が金銭的、肉体的、精神的な面で最も困難であった時期に彼を支えた堀口家ならではの意義深い資料であるといえる。とくに詩歌を愛するキリスト者としての天来をよく表しているといえるだろう。

今後、今回寄贈された天来資料がきっかけとなり、漢詩を専門とされる研究者等の協力も得て、これまでとは異なる角度からも天来研究がさらに深まることを大いに期待したい。

#### 注

- (1) 同志社史資料センターの寄贈の受付は二〇一七年一〇月一九日付。
- (2) 住谷天来の非戦論や、住谷悦治とのかかわりを論じたもので比較的まとまっているものに次のようなものがある。  
住谷一彦他『住谷天来と住谷悦治―非戦論・平和論』（みやま文庫、一九九七年）  
手島仁「第三章 内村鑑三と住谷天来」『手島仁の「群馬学」講座―人物一〇〇話』（上毛新聞社、二〇一五年）、八九―一  
九頁
- (3) 寄贈された住谷天来関連資料のリストは後掲の通り。
- (4) 日本基督教団甘楽教会『甘楽教会百年史』（日本基督教団甘楽教会、一九八四年）、二四〇、二五七、二五八頁
- (5) 昭和町の歩み刊行委員会『高崎市昭和町の歩み』（昭和町の歩み刊行委員会、二〇〇九年）、六〇頁
- (6) 堀口栄蔵編『堀口松五郎百回忌記念 堀田屋一族の系図』（非売品、一九八七年）、六、七、二二頁『甘楽教会百年史』、二四〇、二五八頁
- (7) 『堀田屋一族の系図』、一頁

- (8) 『高崎市昭和町の歩み』、五九頁
- (9) 『復刻版 聖化』(上、下)(不二出版、一九九〇年)
- (10) 「偲 剣道五段錬士・居合道三段 堀口万亀藏」、二〇〇八年九月作成。この資料は堀口万亀藏葬儀の際に配布された故人経歴で、その中に「堀田屋事業の経緯」も記載されている。高崎の「堀田屋」とは次第に別の歩みをするようになった富岡の「堀田屋」は一九五二年に万亀藏が社長となり「有限会社堀田屋」を設立している。
- (11) 『甘楽教会百年史』、二六一頁
- (12) 『上毛教界月報 復刻版』(一一)(不二出版、一九八五年)、一八八頁
- (13) 『高崎市昭和町の歩み』、六〇頁
- (14) 二〇一八年一月八日、筆者は堀口時子さん、真起子さんとともに、天来の生家を訪ね、現当主の住谷輝彦さん夫妻の温かな款迎を受け墓所に案内していただき、お話を伺う機会を与えられた。
- (15) 大島花束、原田勸平訳注『良寛詩集』(岩波文庫)(岩波書店、一九七七年)、四七頁
- (16) 住谷天来『黙庵詩鈔』(平和舎、一九四一年)、三八―三九頁
- (17) 入矢義高他訳注『碧巖録』(下)(岩波文庫)(岩波書店、一九九六年)、一七五頁
- (18) 『黙庵詩鈔』、七六―七七頁

## 住谷天来関連資料（二〇一七年一〇月一九日受贈）

二〇一七年一〇月一九日確認

資料番号	資料名	作成者	年月日	数量	形態	寸法	備考
一	屏風「花無心開花蝶無心菜花」	住谷天来		一隻	屏風	一四七〇×五四〇	六曲
二	扁額「先求神々國与其義」	住谷天来		一面	扁額	五三〇×一五八〇	
三	扁額「治己心善後攻取城者」	住谷天来		一面	扁額	三五〇×一六〇〇	
四	住谷天来建碑関係資料	住谷天来顕彰会 他	一九七八年二月一日	九部 冊子	一紙（五枚）、 冊子	二五七×三六五	〔住谷天来顕彰会ニュース〕第一号、第二号 上記資料複写 〔二〕上記資料複写 〔三〕住谷天来顕彰会会則（複写） 〔四〕住谷天来碑文案（複写） 〔五〕住谷天来顕彰碑四面二種（複写） 〔六〕顕彰碑見解書（複写） 〔七〕非戦愛國の予言者住谷天来の建碑を提唱する（複写）
五	〔堀口松五百部百回忌記念 堀田屋一族の系図〕	堀口栄蔵	一九八七年四月二日	一冊	冊子	二五七×一八二	鈴木委美子氏から堀口栄一郎氏宛の送り状（複写）一枚有り 〔一〕展覧会チラシ
六	〔群馬の九駆者〕（複写）	前橋朝博会発行	二〇〇二年五月	一部	一紙（七枚）	二九五×二二〇	〔二〕リレー講座（二〇〇五年一月一六日開催）レジュメ 〔三〕名刺（複写） 〔四〕堀口眞達氏からの送り状（複写）
七	展覧会「群馬の肖像Ⅱ」関連資料	群馬県立歴史博物館 他	二〇〇五年一月八日	一部	一紙（一枚）	二九六×二二〇	複写一部有り
八	堀田（口）栄蔵宛書簡（住谷天来についての問合せ）	住谷悦治	一九七九年一〇月八日	一通	封書	二五二×一七八	複製二枚有り
九	写真「川辺にて住谷天来他（名）の問合せ」			一枚	写真	一〇七×一四五	リプリント一枚有り
一〇	写真「住谷天来肖像」			一枚	写真	八一×五五四	リプリント二枚有り
一一	写真「住谷天来漢詩『愧我学道』」			一枚	写真	一一六×一七八	
一二	近代日本のキリスト教研究（複写）	萩原俊彦	二〇〇〇年十一月五日	一部	一紙（九枚）	二二〇×二九七	
一三	〔柏木義四郎研究序説〕（複写）	久保千一	一九九八年九月一日	一部	一紙（四枚）	二二〇×二九六	